

の発言を続けてきている。最近作に『The Day They Came to Arrest the Book』この本は危険だ』(八一)。ほかにジャズに関する多くの編著書がある。

(清水真砂子)

示

賀宣 一九一四、中国の児童文学作家。本名は朱縁園。江蘇省の没落地主の家に生まれる。孤独な子ども時代、読書にふけつた経験が、のちに児童文学の道を歩ませることになる。小学校の教員をしたのち、一九三四年から創作を開始。三五年には文芸雑誌「先生」の主編となる。翌年、最初の童話集『小草』を自費出版する。これは旧社会に対する不満と新しい社会へのあこがれを描いたもので、当時多くの小学校教員に支持された。その後「中国少年報」の副編集長などを経て、現在、少年児童出版社副社長、中国作家協会児童文学委員会副主任。作品集には三四四年からの創作を収め、第二次全国少年児童文芸創作賞を受

けた『賀宣作品選』(八〇)や、社会主義革命を進める中で犠牲になつた少年の英雄的な行動を描いた『嘉陵江の水は青く』(六五)、美しいファンタジーの『小さなメノウ』(六三)などがある。

(君島久子)

冒險小説 作中人物がさまざまな事件や障害に遭遇し、それらを乗り越えていく起伏ある姿や振舞いにつきまとった雰囲気が冒險だとすると、およそ子どものための物語はすべて冒險小説だといってよいだろう。子どもの興味や関心を喚起し持続させうる物語には、一定の冒險性は欠かせないからである。したがって歴史小説、探偵小説、SFなども冒險小説の枠内で考えることができるし、『アリス』やトールキン、C・S・ルイスなどの空想的な作品群も冒險性という点からみると、この枠内で捉えられないこともない。ただ、事件の連続と人物の動きに力点がおかれ、そしてその要素こそが読者の想像力を喚起する作品もないわけではない。狭義でいう冒險小説とはその種の作品群で、たとえばイギリスでは、バニヤンの『天路歴程』(一七七八一八四)がその発端だろう。作品の意図は別にして、ここにみられる冒險性は『ロビンソン・クルーソー』(一七一九)や『ガリヴァー旅行記』(二六)、アメリカの『皮脚紳物語』、ヴエルヌの作品群にも共通し、これら大人向けの物語が子ども向けの冒險小説の型をつくり出したといつてよいだろう。マリヤットを筆頭とする

イギリスの冒險小説は、スティーヴンソンの『宝島』（一八八三）、ハッガードの『ソロモン王の宝窟』（八五）に至るまで海外に目を向け、フェニモア・クーパー以来、国内のフロンティアに焦点をしばるアメリカの冒險小説と好対照をなしている。冒險小説はどの時代においても、その国民性や国情を背景にその特質を表わすという、一つの証である。人物や事件の外的な動きの描写に重点をおいてきた冒險小説は、時代が経るに従つて事件にかかわる人物たちの内面的な衝動に視点をしづらうになる。ネズビットの『宝さがしの子どもたち』（九九）がその発端になつた作品の一つで、それがランサムの『ツバメ号とアマゾン号』シリーズに続く新しい伝統をつくり出していくのである。

冒險世界
（定松 正）

一九〇八年（明治41）一月、博文館が刊行した青少年向け月刊総合誌で、終刊は一九年（大正8）一二月である。『冒險世界』は、「日露戦争写真画報」（一九〇四 創刊、のちの「写真画報」）の後を受けて創刊され、二〇〇年一月創刊の「新青年」に引き継がれた。初代主筆の押川春浪は、冒險武俠小説の人気作家であつたが、東京朝日新聞の野球撲滅論に大反論を企画して、社の方針と相いれず、退社してしまった。その後、阿武天風、長瀬春風、森下雨村と主筆は受け継がれたが、英雄主義、武俠主義、冒險主義を基調にした

国権的ナショナリズムを高唱し、明治期の風潮ともマッチして人気を集めた。創刊号は、四六倍判本文二八ページ、油絵三色版一枚、写真版口絵四ページで一五錢であった。執筆陣は、『怪人鉄塔』『鉄車王国』の押川春浪のほかに、阿武天風、巖谷小波、長谷川天渓、児玉花外、土井晚翠、木村小舟らがいて氣を吐いた。冒險小説の源流を形成した。（上洋二）

茅盾
（じゅん）→ マオ・トン

北条誠
（ほくじょう）一九一八・七六（大正7・昭和51）小説家。東京芝居留の鉄道官舎に生まれ、早稲田大学国文科在学中より川端康成に師事。『春服』（一九四〇・二）「阿房」、『埴輪と鏡』（四〇・六、同）が芥川賞候補および「文芸推薦」第二席となつた。戦後、鎌倉文庫の第二出版部長を経て、作家活動に入り、昭和二〇年代に話題となつたNHKの連続ドラマ『向う三軒隣り』の脚本を執筆。中間小説のほか、『緑はるかに』（五五）など少女小説も多く手がけた。（村松定孝）

泡瀬繪本
（ほうそう）えほん

放送劇とは元来ラジオプレイ (radio play) の訳語であつたが、テレビの出現以来広く放送媒体に登場する劇作品を総称するようになつた。このことは、劇の内容をも変化させた。音声だけによる表現によつて触発される聴取者の心象を生命とした放送劇が、強烈な画音の迫力で直接視聴者の感情に働きかけることをねらうものまでを含むようになつた。とくに児童向けの作品ではこの傾向が著しく、さらに民間放送の宿命ともいいう商業主義がこれに拍車をかけ、児童向けの時間帯はSF活劇やナンセンス・アニメなどで埋めつくされているのが現状である。一方、放送劇は教育の手段としても利用されており、NHK や一部民放が教育施設や家庭に向けて送り出した番組の中には良心的な劇作品も少なくなかつた。また、校内放送として教育現場が自主的に制作する放送劇もあり、録音録画機器の普及によって技術的にかなり高度な作品も生まれるようになつてきた。戦後、放送劇の台本が読み物として出版される例も多く、『三太物語』全四巻（一九五〇～五一、青木茂原作、筒井敬介脚色）などは広く読まれた。また、放送劇台本を物語化して出版

放送劇 放送劇とは元来ラジオプレイ (radio play) の訳語であつたが、テレビの出現以来広く放送媒体に登場する劇作品を総称するようになつた。このことは、劇の内容をも変化させた。音声だけによる表現によつて触発される聴取者の心象を生命とした放送劇が、強烈な画音の迫力で直接視聴者の感情に働きかけることをねらうものまでを含むようになつた。とくに児童向けの作品ではこの傾向が著しく、さらに民間放送の宿命ともいいう商業主義がこれに拍車をかけ、児童向けの時間帯はSF活劇やナンセンス・アニメなどで埋めつくされているのが現状である。一方、放送劇は教育の手段としても利用されており、NHK や一部民放が教育施設や家庭に向けて送り出した番組の中には良心的な劇作品も少なくなかつた。また、校内放送として教育現場が自主的に制作する放送劇もあり、録音録画機器の普及によって技術的にかなり高度な作品も生まれるようになつてきた。戦後、放送劇の台本が読み物として出版される例も多く、『三太物語』全四巻（一九五〇～五一、青木茂原作、筒井敬介脚色）などは広く読まれた。また、放送劇台本を物語化して出版

されることも多く、北村寿夫の『笛吹童子』全三巻（六〇）など、その例は多い。学校の校内放送劇脚本も数多く出版されていることも付記しておく。（對馬 昇）

放送童話 ラジオ・テレビで放送放映される童話。

台本がなく演者の即興によるものと、台本として別の作者あるいは演者が執筆するものがある。ラジオでは音楽・効果の協力があるが、ことばで色や形、動きを表現し、挿絵のない文学作品に近い。テレビでは挿絵を伴う絵童話、絵本に近づく。また演者の個性が強く現れ、別の作者が執筆しても、芸能と似かよう。

一九二五年（大正十四年）ラジオ放送開始の翌年「子どもの時間」が生まれ、昭和初期にはラジオのおばさん村岡花子、おじさん関屋五十二の活躍があつた。第二次大戦後に、飯沢匡、筒井敬介、平塚武二、松谷みよ子、香山美子、山中恒、山元護久、井上ひさしなどの創作が盛んになつたが、録音、録画、出版された例は少なく、その時限りの生きのよさが特色だつた。一九五三年（昭和二十八年）テレビ放送開始後は、児童劇、アニメなどに溶け込む一方、出版された本の朗読が行われ、俳優が関心をみせているが、朗読、放送を考えに入れて執筆する作者も増えてきた。さらに、朗読、放送を見直し創作の契機にもしようとする動きもあり、各地の朗読研究会やセミナーなどへの関心が高まつてゐる。（北川幸比古）

方定煥 → パンジオンファン

宝文館

一九〇一年(明治三十四年)

一月二十五日、大

阪宝文館東京出張所を譲り受けた独立、創業。二七年七月一六日改組して株式会社宝文館設立。月刊誌「令

女界」「若草」などを発行した。「令女界」は二二二年四月創刊、四四年三月で休刊、四六年四月復刊して、五

〇年九月で終刊。最初は少女雑誌であったが、しだいに女学校上級生対象に変わり、独自の華麗な世界をつくりあげた。執筆者は加藤まさを、吉屋信子、西条八十、竹久夢二、蕗谷虹兒らが中心である。(二上洋二)

包 蕃 (ほう) → パオレイ

ホガード エリック Erik Haugard 一九二二)

デンマークの児童文学作家、劇作家、詩人、翻訳家。デンマークでは農業労働者として働いていたが、のちにアメリカのワイオミング州に移住して牧羊者となる。そこで、祖国デンマークの古き時代の風土、たと

えばバイキングなどを素材として作品を執筆、「バイキングのハーコン」(一九六三)、『どれい少女ヘルガ』(六五)などを発表する。詩的な散文体で書かれたこれらの作品は、戦争、奴隸制の悲惨さをテーマとしているが、このテーマは彼の児童小説すべてにみられ、『風のみなしご』(六六)はアメリカ南北戦争を舞台とし、『小さな魚』(六七)は第二次大戦中、ナチスからの少年たちの逃避行を扱っている。ホガードはほかにも、劇作やデンマーク語での詩作など、多くの分野で活躍しているが、とくにアンデルセンの全集をすばらしい英語に翻訳したことは、彼の児童小説とともに高く評価されている。

(越智道雄)

北欧神話 (ほくおう) 北ヨーロッパの北欧諸国(スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、アイスランド)に伝えられる神話で、それ自体が雄大深刻で興味深いだけでなく、近代ヨーロッパの最大の形成力であるゲルマン民俗の信仰や世界観を伝えるものであるために、ゲルマン神話とも呼ばれて近年すこぶる注目された。ただ、他のゲルマン諸国(イギリス、ドイツ、オランダ、フランス)では、早くからギリシア、ローマ文化やキリスト教が伝わったため、古い神話がほとんど滅びて、今はただ北欧にのみ残っているため、一般にゲルマン神話の名をさけて北欧神話と呼ばれる。さらに北欧でも古き姿ははつきりせず、現代に伝えられている

神話は一二、三世紀ころに編まれた二つの『エッダ』の伝えるところを主にしているため、北欧神話と呼ぶよりもエッダ神話とすべきだとする学者もある。さまざまの神々と巨人の抗争を中心に、オージン、トール、フレイ、テュル、バルドルらの男神、オージンの妻フリッゲ、絶世の美女フレイヤ、トールの妻シフ、青春のりんごを保管するイドゥン、また巨人族の出でてながら神々の世界にもぐり込んでいた狡智にたけたロキなどの活躍が語られるが、みなに愛されたバルドルがロキの策謀によって殺されたのを機縁に巨人族と神々の決戦を迎へ、彼らはほとんど共倒れとなつて死に、最後は炎の神スルトルの投じた炬火で世界を支えているユグドラシルの巨樹も炎に包まれ、大地は海に没する。これがラグナレク(神々の黄昏)で、やがてまた新しい大地が海中から浮かび出ることが予言されているが、とにかく世界はいつたんは滅びるとされているのだ。北欧人の人生観の悲劇的な壮大と深刻をまざまざと表したものと言える。

ホグロギアン ナニー Nonny Hogrogian 一九三二一 アメリカのイラストレーター、絵本作家。出版社勤務ののち、イラストレーターとして児童書にかかわり、『Arbor Day 植樹祭』(一九六五)や『Three Apples fell from Heaven 天国から落ちてきた三つのりんご』(七一)などの挿絵を手がける。また自身も絵本の創作

(山室 静)

星 新一 一九二六年(大正十五年)作家。本名親一。東京都に生まれ、一九四八年東京大学農学部卒業。五七年SF同人誌『宇宙塵』に参加、同誌に発表した『セキストラ』が江戸川乱歩、大下宇陀児に認められ、文壇に登場した。日本文芸家協会、日本推理作家協会、日本SF作家クラブ所属。農芸化学会会員。星製薬の創立者星一の長男、母方の祖父は人類学者小

ホシシンイチ

金井良精、祖母は森鷗外の妹喜美子。第一短編集『人

に携わり、『Always Room for One More サウムモウ ひとつのお部屋がある』(六六)および『おまうはよいてんき』(七一)でコールデコット賞を受賞、ほかに『どうぼうとおんどり』(七四)などがある。(早川敦子)

朴和穆 わばく――パク フアモク

ボーリジン ラージー・ニアリヤ パリヤ ピョートル・ニコラエフチク 一九二五年(昭和二年)ソビエトの児童文学作家。独ソ戦でレニングラードの封鎖を体験、一七歳で戦線へ。様々な職業を経て作家になつた。数多い中・短編の内容は多様だが、ユーモアと抒情性を交え、大人との接触の中で形成されていく少年期の心理などを描く。『森の精のいる村』(一九七二)では戦争、生命の尊さ、自然への愛がテーマ。中編は『Кирпичные острова レンガの島』(六〇)、作品集は『Рассказы о веселых людях и хороший погоде 明るい人たちとよい天気の話』(六〇)など。

(服部素子)

造美人』(一九六二)は第四五回直木賞候補、『妄想銀行』

(六七)および過去の業績によって日本推理作家協会賞受賞。ショートショートによって広く知られたが、時代小説、伝記小説、戯曲も執筆。児童向けの作品に『黒い光』『気まぐれロボット』などがある。児童の興味と理解力に配慮した内容と表現を選んでいるが、星新一の文学世界の本質は変わらず、何かを減じたのでも加えたのでもないという特色がある。

(北川幸比古)

星野水裏 一八八一～一九三七(明14～昭12)

詩人。本名久。筆名は水野うら子、淡路しま子、白頭、白桃も用いた。新潟県新発田市生まれ。早稲田大学高

師部国漢科卒業。実業之日本社に勤務。『日本少年』の最初の主筆となつたが、志願して一年間兵役に服す。

帰社し、一九〇八年に創刊された「少女の友」の主筆

として編集に携わる。表紙に川端龍子らを起用して気

品ある雑誌づくりを志し、新人作家を育て、自らも詩

や実話を執筆。同誌に発表された詩は、第一詩集『浜

千鳥』(一九一)をはじめ、『宵のあかり』(一五)、『赤い椿』(一七)、『白桔梗の花』(一〇)などの詩集に収録され、いずれも実業之日本社から刊行。悲傷に満ちた抒情性が少女たちの心を捉えた。明治末期に少年少女詩の領域でいち早く口語詩を生み出し、階級の差や不運といった現実のもつ宿命性を物語詩的に表出した点

がきわめて斬新で、史的意義は大きい。「日本少年」に

少年小説を発表。

(谷 悅子)

ボスコ アンリ Henri Bosco 一八八八～一九七六

フランスの作家。南フランスの田園を舞台に『マリクロワ』(一九四八)、『影』(七八)など秘教的な作品を残した。代表的な児童文学作品は『少年と川』(四五)、『島の狐』(五六)、『犬のバルボッシュ』(五七)、『バルカボ』『パスクレ』(五八)の五部作で、少年パスクレが南フランスの自然と交感しながら、マルチーヌ伯母さん、親友ガツゾとの魂の触れ合いを通じて成長する過程が独特の詩情と幻想味豊かに描かれている。

(天沢退一郎)

ポストマ リディア Lidia Postma 一九五二～オランダの女流児童文学作家、画家。はじめての仕事『ア

ンデルセン童話集』のイラストで、オランダのイラストレーターにとり最高の評価である「金の鉛筆賞」を

受賞(一九七六)。またはじめての絵本『ぬすまれたかがみ』(七六)と『作日の絵本『魔女の庭』(七八)とで、第

七回BIB世界絵本原画展賞金のリング賞を受賞(七九)。はじめての絵本は少年が竜を退治して大勢の人々を救う話。二作目は魔女と思つたら、意外に優しい老

女で、今度は子どもたちと種々の冒險を重ねる話。二つとも幻想的な童話につり合つた絵が美しい。二つの絵本とも日本語に訳されている。

(熊倉美康)

ボストン ルーシー Lucy Boston 一八九二～イギリスの児童文学作家、小説家。六〇歳を越えてから

書きはじめ、詩的ファンタジーの領域に新生面を切り開き、一九五〇年代のイギリス児童文学の主要作家の一人となつたことで知られている。三五年以来住んでゐるハンチンドン州ヘミングフォード・グレイにある古い地主屋敷を背景にして『グリーンノウの子どもたち』(一九五四)を書いて以来『グリーンノウの石』(七六)に至るまで六冊のシリーズを書いているが、このシリーズは六一年度カーネギー賞を受けた『グリーンノウのお客さま』を除き、あとはみな古い屋敷に流れる時の過去と現在を結びつけ、そこに生じる不思議を詩的に描いた作品である。『みどりの魔法の城』(六五)や『海のたまご』(六七)は低学年向きの作品であるが、とくに後者は一転して海の魅力をあますところなく描いたファンタジーとして高く評価されている。(猪熊葉子)

細川武子 (ほのかわ)
一八九二—一九五六(明二十五—昭三一)
児童文学作家、口演童話家。東京に生まれ、一九一二年に東京府女子師範を卒業後、幼小女学校の教師を経て、東京の私立立華学園の中・高校長、同幼稚園長を務める。教師生活の体験から童話に興味を抱き、島崎藤村、浜田廣介に師事。また口演童話家、作家、研究者から構成される日本童話協会に所属し、童話の創作と口演に携わる。一七年六月に「大阪朝日新聞」の懸賞お伽噺に『白鳩の願ひ』が入選し、以来、「良友」「少女世界」「幼年俱楽部」「少年俱楽部」「少女俱楽部」などに作品を発表。童心主義の作家として知られ、一方放送童話にも活躍した。二七年からは、前年に発足した童話作家協会に所属した。童話集に『細川武子放送童話集』(一九三九)、『おかあさん』(四〇)など、ほかに『女学生記』(四一)、『少女の国』(四八)、『少女の四季』(五〇)などの少女小説や『堤中納言物語』(五二)などの名作物語もある。

細川裕太郎 (ほそかわ ゆうたろう)
一九一四—(大三一)
童謡詩人。本名雄太郎。滋賀県蒲生郡日野町生まれ。代表作『あの子はたあれ』『ちんから峠』。三九年「童謡と唱歌」に投稿した『泣く子はたあれ』を海沼実が作曲、四〇年の秋キンケレコードに持ちこんだ。ディレクターの柳井堯夫がタイトルを「あの子はたあれ」に改め、詞も大幅に改訂してヒットする。現在は、故郷で悠悠自適の年金生活を送るかたわら、詩誌「葉もれ陽」を主宰している。

ホーソン ナサニエル Nathaniel Hawthorne
一八〇四—六四 アメリカの小説家。清教徒の古い町マサチューセッツ州セイレムに生まれ、そこの税関の官吏をしながら作品を著す。『緋文字』(一八五〇)で知られる一九世紀アメリカン・ルネッサンスを代表する作家だが児童文学にも貢献。『おじいさんの椅子』(四二)でニューヨークランドの歴史を、『伝記物語』(四二)で偉人伝を教訓を込めて語った。とくに、ギリシア神話、

ローマ神話の「メドウーサの首」や「パンドラの箱」などの話をかなり潤色し、子ども向けにより明るく楽しく、自由に書き直した『ワンダー・ブック』少年少女のために』(五二)と、『タンブルウッド物語』少年少女のために』(五三)が高く評価されている。これらの作品において、ホーソンは、もとの神話そのものの本質が生きされているかぎり、たとえ神話特有の古典的な外貌や趣が失われてもよいという態度を取り、再話の可能性を広げている。

(藤森かよこ)

ポーター エリナー Eleanor H. Porter | 八六八
「一九一〇 アメリカの児童文学作家、小説家。病弱のうちに少女時代を過ごし、健康を回復したのち音楽を学ぶ。結婚後しばらくして文筆生活に入り、数冊の児童文学、小説を書いた後、『少女パレアナ』(一九一三)を発表。孤児である少女主人公のけなげな明るさと積極性を描いて、広く読者の共感を得た。ほかに、『パレアナの青春』(一五)、『スウ姉さん』(一一)などがある。

(横川寿美子)

ポター ピアトリクス Beatrix Potter | 八六六
「一九四二 イギリスの『ピーターラビットの絵本』の作者。後半生、牧羊業と自然保護に尽力した。ロンドンの有閑階級に生まれる。生来引っ込み思案だったが、両親が娘の社交を厳しく制限したため、ほとんど家庭内に引きこもり孤独な生活を送った。が、恵まれた絵

の才能と優れた観察力・記憶力、そして根気強さで、わめて個性的な人生を切り開いていった。毎夏家族ぐるみでスコットランドやイングランド北部の田舎へ避暑にいき、野生の動植物を観察して、絵にスケッチした。とくに茸と菌類に関する二八〇枚あまりの植物学的で正確な絵が残されている。また一四歳から三二歳まで書いた独自の暗号による日記も残されている。絵本作家となつたきっかけは、イギリスの自然保護団体ナショナル・トラストの創立者で牧師のローンズリー博士に出会つて勧められたからである。彼女は以前から知り合いの子どもたちによく絵物語の手紙を書いていたが、その一つにより処女作『ピーターラビットのおはなし』(一九〇二)ができた。それから四七歳で結婚する一九一三年直後まで『グロースターの仕立て屋』(一九一三)、『このトムのおはなし』(一九〇七)など二〇余冊の絵物語本が誕生した。どれも動物の擬人化物語だが、自然界の動物の属性、力関係を少しも曲げず、そこにユーモアと軽い風刺・皮肉を交えつつ人間の平凡な日々の生活に鋭い光を当てた文学を創造した。絵と文の連携プレーもみことで、子どもの絶大な支持を得ると同時に、絵本づくりの手本にされている。ポターはローンズリー博士の自然保護活動を積極的に応援して、自らもせつせと湖水地方の土地を購入、結局四〇〇〇エーカー以上の土地を所有して、遺言でそのすべてを

ナショナル・トラストに寄付していく。また買った農地で牧羊を行い、羊の品種改良をし、牧羊協会の会長にもなった。残されたおびただしい水彩画などはロンドンのヴィクトリア・アルバート博物館などに集められている。

(吉田新二)

北海道児童文学全集 一九八三～八四年(昭58～59)立風書房より刊行。全一五巻。編集委員は加藤多一、木原直彦、西田良子、和田義雄。収録条件は(1)北海道出身、一時在住、北海道にかかわりをもつ作家。(2)北海道を舞台にした、または素材にした作品の二つを兼ね備えること。創作・ノンフィクション・三三編のほかに童謡・詩・昔話を収録。伊藤整、宇野浩一、西野辰吉、石森延男、神沢利子、後藤竜一、滋野透子、若林勝などの作品を収める。一五巻に児童文學略年表を付す。

ホッジス ウォルター Walter Hodges 一九〇九

イギリスの挿絵画家、歴史物語作家。劇場の舞台美術や衣装、広告などのデザインを経て雑誌の挿絵を手がける。写実的で古風な描線は、とくに歴史物語に生かされて、一九五〇、六〇年代の、指導的挿絵画家となる。代表作に『コロニアス海を行く』(一九三九)、挿絵『銀のナイフ』(五六)、『アルフレッド王の勝利』(六七)などがある。ふたば『Shakespeare's Theatre』ショーケスピアの劇場』(六四)は出色でケイト・グリーナー

ウェー賞を受けている。

(藤森かよい)

ボーデン ニーナ Nina Bawden 一九二一五九イ

ギリスの小説家、児童文学作家。大人向けの小説でも高い評価を受けている。子ども向けには、はじめ比較的よくある冒險小説を書いていたが、困難な状況にある子どもへの共感を一つの特色とする。これは一九七一年『Squib』スクイップで深化をみせた。続いて七年の『帰ってきたキャリー』は、自らのウエールズ地方での疎開体験をもとに子どもの日から戦時の村の人間を描いた代表作。『ペパーミント・ピッグのジョニー』(一九七五)はガーディアン賞受賞。(酒井邦秀)

ボームウイ ミシェル＝エメ Michel-Aimé Bau-

douy 一九〇九～フランスの児童文学作家、劇作家、教授。自然や動物と少年少女の触れ合いを描いた。『L'enfant aux aigles』ワシを飼う子ども』(一九四九)、『Bruno, roi des montagnes』山の王ブリュノ』(五三)、『オートピコット森の公達』(五七)、科学、職業、スポーツなど現代生活の関心事を取りあげた『風の王子たち』(五六)、『ミックとオートバイ』(五九)、『Combats pour un jardin』庭のための争い』(六九)、『A l'erte sur le Roc Blanc』ロック・ブランに気をつけろ』(七〇)など。受賞作品、翻訳多数、新しいテーマへの意欲も旺盛である。

ボトカー セシル Cecil Bodker 一九二七～デン

マークの詩人、作家。デンマーク学士院主催の児童書コンクールに応募した『シーラスと黒い馬』(一九六七)が入選。以後児童書にも手を染める。現在も続くシリアルスシリーズは、デンマークには珍しい骨太の冒險小説である。ほかにエチオピアを舞台にした『Leopardenヒヨウ』(七〇)や、聖書に題材を求めた一連の作品がある。一九七六年には、国際アンデルセン賞を受賞した。

(木村由利子)

ホーバン ラッセル Russell Conwell Hoban 一九二五) アメリカの児童文学作家。美術学校卒業後、雑誌、テレビのアートディレクターを経て作家になる。代表作の絵本『おやすみなさいフランシス』(一九六〇)では、子どもの心理を巧みに捉え、ユーモラスに描く一方、空想物語『親子ネズミの冒険』(六七)では、存在、無限といった抽象的テーマを扱うなど意欲的で、絵本から大人の本まで幅広い作品を書いている。(白井澄子)

ホーバン リリアン Lillian Hoban 一九二五) アメリカのイラストレーター。学生時代に美術とダンスを学び、児童文学作家ラッセル・ホーバンと結婚後、夫の作品『親子ネズミの冒険』(一九六七)などに挿絵を描きはじめる。また、共作の絵本、穴熊の女の子、フランシスのシリーズ(『フランシスのいえで』(六四)など)も有名。チンパンジーの兄妹を主人公にした『アーサーのくまちゃん』(七四)など、子どもの日常を漫画風な

タッチで描いた、自作の絵本もいくつか描いている。

(白井澄子)

ホープ アンソニー Anthony Hope 一八六三—一

九三三) イギリスの小説家。本名はアンソニー・ホープ・ホウキンズ。弁護士を経て雑誌に作品を発表。情報省への貢献によりナイト爵位を授けられる。『たのしい川べ』の作者、グレーリーの遠い親戚。ルリタニア

国の王権を、その若き王にかけて救うイギリス人青年の物語『ゼンダ城のとりこ』(一八九四)と、その続編『ヘンツォウのルパート』(九八)などが有名。(藤森かよこ)

ホフマン エルンスト テオドール アマデウス Ernst Theodor Amadeus Hoffmann 一七七六—一八二二) ドイツの作家、音楽家、画家。『黄金の壺』(一八一四)など、怪奇と幻想にみち、しかも同時にそれと異質な現実的写実性をもつ小説を書いて、ドイツマン

派の代表的作家とされている。その思想や感情の表現に最もふさわしいものとして、好んで童話を創作した。チャイコフスキイ作曲のバレーにもなつて親しまれている『くるみ割り人形』とネズミの王さま』や、*啓蒙主義への批判を込めた『ふしぎな子』などは、フケーラとともに編纂した『Kinder-Märchen 子どものメルヒエン』二巻(一六、一七)に収録されている。彼らロマン派の作家が拓いた創作童話の世界はハウフやアンデルセンに引き継がれ、無限に向かうはるかなあこがれ、

現実の奥に迫るファンタジーは、マクドナルドや C. S. ルイス、また M. エンデら、後世の作家に大きな影響を与えている。

(上田真而子)

ホフマン ハインリヒ Heinrich Hoffmann 一八〇

九〇九四 ドイツの医師、絵本作者。ドイツとフランスの大学で医学を修め(一八二九~三四)、故郷フランクフルトで医院を開業する。その後同市市立精神病院で主任医師を務め(五一~七八)、病院の改築と治療法の改革を行う。子どもの患者の治療に役立つ絵を描いてそれを患者に見せて効果をあげる。一八四五年のクリス

マスに自分の四歳の子の絵本を探したが、良いものが見当たらず自分で描いて自作の詩を添えて与える。それが偶然出版者の目に留まり、翌年一五枚の絵入り石版刷で出版され、大変な売れ行きを示す。それが『もしやもじやペーター』として国際的に有名になり今日までほとんど世界中に広まっている。『もしやもじやペーター時代』は児童心理の発展段階を表すことばとなつてゐる。ホフマンは『König Nußknacker und der arme Reinhold くるみ割り人形とあわせなライヘルト』(五一) &『Bestien der Faulpelz 猿け者のバストイアハ』(五四) や『Im Himmel und auf der Erde 天上と地上で』(五七)などを出版するが、子どもの想像力と遊戯本能に訴えて身近なモラルと、原因と結果、罪と罰との関係をはつきりと示す『もしやもじやペーター』

(佐々木田鶴子)

ホフマン フェリックス Felix Hoffmann 一九一〇七五 スイスのイラストレーター。グリム童話に素材を取った絵本が多く、『ラップンツェル』(一九四九)、『ねむりひめ』(五九)、『七つのからす』(六一)など。ほかに、民話を取りあげた『しあわせハンス』(七五)などもある。石版画を用い、抑えた色調が特徴。ハンス・フィッシャー、カリジェとともに、スイスのイラストレーターの水準を国際的に高めた。ステンドグラスも制作。

ボボフ ニコライ・Е. Николай Евгеньевич Попов 一九三八~ ソビエトの画家。ロシア共和国のサラトフに生まれ、モスクワ印刷大学を卒業。一九六四年から内外の文学作品のイラストで活躍をはじめ。七年『ネートチカ・ネズヴァーノヴァ』、七七年『アラビアンナイト』のイラストで IBA の金メダル、七五年『ロビンソン・クルーソー』で BIB 世界絵本原画展のグランプリを受賞。日本では『まるいちきゅうのまるいちにち』(世界各国の画家と共作) が出版された。

(松谷さやか)

ボーム L. フランク L. Frank Baum 一八五六~一九一九『オズ・シリーズ』を書いたアメリカの児童文学作家。ニューヨーク州チトナンゴウ町で生まれる。父は桶屋だったが、オイル・ラッシュで成金となる。

の成功にははるかに及ばない。

(植田敏郎)

ホフマン フェリックス Felix Hoffmann 一九一〇七五 スイスのイラストレーター。グリム童話に素材を取った絵本が多く、『ラップンツェル』(一九四九)、『ねむりひめ』(五九)、『七つのからす』(六一)など。ほかに、民話を取りあげた『しあわせハンス』(七五)などもある。石版画を用い、抑えた色調が特徴。ハンス・フィッシャー、カリジェとともに、スイスのイラストレーターの水準を国際的に高めた。ステンドグラスも制作。

ボボフ ニコライ・Е. Николай Евгеньевич Попов 一九三八~ ソビエトの画家。ロシア共和国のサラトフに生まれ、モスクワ印刷大学を卒業。一九六四年から内外の文学作品のイラストで活躍をはじめ。七年『ネートチカ・ネズヴァーノヴァ』、七七年『アラビアンナイト』のイラストで IBA の金メダル、七五年『ロビンソン・クルーソー』で BIB 世界絵本原画展のグランプリを受賞。日本では『まるいちきゅうのまるいちにち』(世界各国の画家と共作) が出版された。

(松谷さやか)

ボーム L. フランク L. Frank Baum 一八五六~一九一九『オズ・シリーズ』を書いたアメリカの児童文学作家。ニューヨーク州チトナンゴウ町で生まれる。父は桶屋だったが、オイル・ラッシュで成金となる。

(植田敏郎)

り、シラキュー市の大邸宅で育つ。心臓障害があつたが、逆療法で陸軍士官学校に入れられて、生涯軍隊嫌いの平和主義者となつた。有名な婦人参政権論者の娘と結婚して四児を得たが、その子らに語つた話を、知り合いの挿絵家デンスロウの挿絵で出版したのが『オズの素晴らしい魔法使い』(一九〇〇)である。それが二年後に舞台化され大ヒット、続編を期待する声にわかに高まり、生前一四冊まで書き、死後もトムソン、ニール、スノウなど他人が書き継ぎ計二六冊に達した。作家として立つまでは、さまざまな職を経験。少年期から書くことが好きで、印刷機を買ひ家庭新聞を発行したり、切手収集の本を出したり、養鶏に凝りその専門誌の寄稿家になつたり、また芝居に耽つて役者になつたり、結婚後は父の業から車の潤滑油のセールスマンをしたり、ストアを経営したり、新聞記者もした。作家となつてからもフロイド・エイカーズなどいくつかのペンネームを使って金儲けの通俗小説を書いたり、自作の映画化をしてみたりしている。晩年はハリウッドに移り住んだが、行き詰まって破産。作品は『オズ・シリーズ』以外にも多数あつたが、「オズ」が最も豊かな空想力と創造性に富み、アメリカならではのファンタジーとしてその評価は極めて高い。

(杉山洋子・吉田新一)

ボーモン夫人 (ホーモン夫人 Jeanne-Marie Leprince de

Beaumont 一七一～八〇 フランスの童話作家。不幸な結婚を経て英國へ渡り、再婚後子どもたちの教育に打ち込み、作品を書きはじめた。ロンドンの新聞に発表した童話をまとめた『Magasin des Enfants 子どもの雑誌』(一七五七)は、賢明な女教師と優等生たちとの対話という形式をとり、良家の子女に必要な歴史、聖史、地理などのあらゆる知識を盛り込んだ内容が、やさしい文章で楽しく読めるよう工夫されている点で、当時としては新鮮なものであつたが、今日では露骨な教育的意図ばかりが目立つ。ただし、その第五日の第五話に入っている『美女と野獣』は、伝統的昔話の魅力を備えた、簡潔で効果的な文体の美しい物語である。その後も帰国を間に挟んで『Magasin des Adolescents 青年の雑誌』(六〇)と『Magasin des Pauvres 貧者の雑誌』(六八)、さらに『Contes moraux 教訓物語』(七四、七六)など、精力的に著作を続け、七〇冊に及ぶ本を残した。

(谷 恭子)

ポラジンスカ ヤニーナ Janina Porazinska 一八

八八～一九七一 ポーランドの女流作家・詩人。今世紀はじめから長期にわたり児童雑誌の編集に携わり、また子どものために詩や物語を書き続けた。民話など伝承文学研究でも第一人者であり、『千びきのうさぎと牧童』(一九六一)、『Starodzieje むかし物語』(六一)など民話、伝説の再話が多く、『ふしづなくつ』(五八)、

『Macius Skowronek ひばりつ子マチュウシ』(一一七)などの創作にも民俗的な色彩が濃い。ほかに詩集『Wojtusionej izbie ヴォイトウシのいえ』(二五)など。

(内田莉莎子)

ほら話 ほらば 笑い話の中の誇張譚といわれるもの

で鴨を取ろうとして、あべこべに鴨にひかれて空へ舞いあがるという「鴨取権兵衛」をはじめ、「源五郎の天昇り」「隠れ蓑笠」「尻鳴り籠」などがある。古い因習や保守的な道徳観、抑圧的な体制に縛られながら、日本の民衆は、権力者への嘲笑、特權階級への風刺を込め、また自由へのあこがれ、束縛からの解放という願いを込め、おおらかでウイットに富んだほら話を生み出し、伝承してきた。実際に、たとえば備後一宮様のほらふき会では、近在はもとより遠くからも話自慢の男たちが集まってきてほらを吹く。山形県の上ノ山あたりのほら吹き会では、その年の横綱にホラノ吹藏、大関に嘘野語郎などの称号が授けられるという。笑い祭りや、ほら吹き会などに発揮される民衆の樂天性が、幾多のほら話を生み出し、またほら話の伝承を支えてきたといえよう。

(西郷竹彦)

堀内新泉 ほりうち しんせん 一八七三～歿年不詳(明六～?) 小説家。京都生まれ。東京英語学校を卒業後、第一高等

中学校に入学したが中退した。小説家を志望し、幸田露伴の門に入った。一九〇七年、博文館の『家庭百科

全集38』として、『婦人常識百話』を刊行以来、青少年の立志・実務を啓蒙したり、婦女子の作法・德育を高めようとする考え方が、博文館の出版方針と合致していった。一〇年には、五月に『商家少年読本』(貞立志読本)を、一二月には『現代執務法』を出し、以後も『業才学』(一九一)、『少年百科叢書』の第一編として『少年立志編』(一)、『常識現代女大学・花嫁の巻』(一二)、『農業夜学読本』上・下(一三)などを、いずれも博文館から出版した。小説は、明治から大正にかけて、『汗の価値』(一)、『努力』(一三)など立志小説が多い。

堀内誠一 ほりうち せいいち 一九三三～八七(昭7～昭62) グラ

フィックデザイナー、絵本作家、挿絵家。岡案家を父に東京向島に生まれる。日大第一高校中退、伊勢丹宣伝課に勤める。装飾・広告デザイン、雑誌「アンアン」の編集デザイൻなどを経て、絵本『くろうまブランキ』(一九五八)やゴッデンの『人形の家』の挿絵(七七)など多数の作品を生む。『父の時代私の時代』(七九)、『パリからの手紙』(八〇)、『絵本の世界』(八四)などの著書がある。

(吉田新二)

堀尾青史 ほりお せいし 一九一四～(大3～) 児童文学作家、紙芝居作家。本名勉。兵庫県高砂市に生まれ、明治大学中退。詩作から文学活動に入り、高橋新吉ら

に学ぶ。一九三八年日本教育紙芝居協会設立とともに、同会機関誌「教育紙芝居」の編集に携わり、紙芝居『うづら』、『芭蕉』などの脚本も手がけて知られる。戦後にも、『じこへいくのかな』、『くじらのしま』ほか多数の紙芝居脚本を書き、後継者指導にも当たる。児童文学作品としては、『松葉づえの少女』(一九八一)など。また、宮沢賢治研究者でもあり、『年譜・宮沢賢治伝』(六八)ほかの編著がある。戦前からの紙芝居運動、編集者活動などによって広範な児童文化関係者と交流があり、初山滋らの絵画にも詳しい。六九年、城戸幡太郎、稻庭桂子らと子どもの文化研究所設立、金沢嘉市らと児童文化運動を推進。八七年より同研究所所長。

(上地ちづ子)

堀 紫山 (はりさん) 一八六三～一九四〇(文久3～昭15)
ジャーナリスト。本名成之。下館藩生まれ。一八八〇年ごろ狂歌作家として名を知られる。九〇年ごろ読売新聞社に入社。硯友社派作家と親しく、児童文学関係の仕事では、『こがね丸』をめぐる巖谷小波との文体論争が有名で、そのほかにはいずれも九一年の『読売新聞』に発表した『二人むく助』評、『小公子』評があり、また児童向き作品には『少年読本』第三八編の『大塩平八郎』(一九〇一)がある。

堀 文子 (ほりみこ) 一九一八～(大7～) 日本画家。
東京麹町に生まれ、女子美術専門学校にて日本画を学

ぶ。一九四七年ごろより絵雑誌「ふたば」に執筆、新しい日本画の個性的表現とみずみずしい色彩感覚により斯界の注目を集め、「青い鳥」(トッパン絵本)、「ことものせかい」(至光社)の表紙(一九五一～六〇)、および『ピップとちょうどよう』(一九六七)などを執筆。『き』(六八)は現在も刊行中。『くるみ割り人形』(六八)によりボローニア絵本賞受賞。創画会会員。(久保雅勇)

ボルン アドルフ Adolf Born 一九一〇～ チェコスロバキアのイラストレーター、グラフィック・アーティスト。プラハの芸術工業大学、造形芸術アカデミーにて学ぶ。人物や動物をデフォルメし、はつきりした輪郭で漫画的に描く画風は独特の世界をもつ。ジーハの『ビーテクのひとりたび』(一九七三)、『ビーテクとなかまたち』(七四)、『ビーテクだいかつかやく』(七五)、(ビーテク三部作)など近代童話の挿絵を多く描くほか、アニメーション・フィルムの制作にも従事、最近ではマツオウレクと組んで絵本にもなった『ふしぎなでんわ』(八一、ドイツ語よりの重訳、チエコ語の原題は『Mach a sebesta』マッハとシエベストバー)がチエコで人気を呼んだ。

ホワイト E·B Elwyn Brooks White 一八九九～一九八五 アメリカの児童文学作家、エッセイスト。大学を卒業後、新聞や雑誌のコラムニストなどを経て、「ニューヨーカー」誌の編集者となり、同誌にエッ

(保川亜矢子)

セイや詩などを発表。児童文学としては、『ちびっこスチュアート』(一九四五)、『シャーロットのおへりもの』(五二)、『白鳥のトラムペット』(七〇)があり、ハンドィを背負つた人物たちが生きようとする姿をユーモラスに描き、現実描写と空想的要素とが融け合つた作品となつてゐる。中でも『シャーロットのおへりもの』が優れ、殺される運命を悲しむ豚を、雌ぐもが糸文字を織つて救い、やがておのずから卵を生んで、生を全うしていく物語には、ペーネントが流れ、生と死の流転が語られてゐる。アメリカのリアリズムの伝統をくみ入れつつ、この国のファンタジーを深化させた作品。日本では、この映画が評判となり、その後、映画題名が用いられるようになつて、翻訳本が普及した。

(原 昌)

ホワイト T·H Terence H. White 一九〇六一六四 イギリスの児童文学作家。インドの地方警察長官の息子として生まれる。両親の不和のため、きわめて不幸な幼年時代を過ごした。ケンブリッジ大学で教育を受け、私立の名門男子校ストウ校の英語主任教師となる。やがて文筆に専念するようになり、マロリーの『アーサー王物語』の再話の四部作『The Once and Future King』過去のそして未来の王などを発表する。第一作目は『The Sword in the Stone』石にささる短剣』(一九三九)である。

(中野節子)

セイや詩などを発表。児童文学としては、『ちびっこス

黄谷柳

ホワンクーリュウ

一九〇八~七七 中国の作家。原

籍は広東省、香港に生まれる。抗日戦争初期より創作をはじめ、新聞記者をしながら、「華商報」に『蝦球物語』(一九四七~四八)を連載、好評を博す。これは浮浪児の生きざまを鮮やかに描いた物語で、四九年に開かれた第一次文学芸術工作者代表大会で最優秀作に選ばれた。その後日本でも翻訳を重ね、上演もされ評判となる。そのほかに童話『大象的経験』(五五)、中編小説『接班人』(五五)などの作品がある。(中島久美子)

翻案

あん 文学用語。このことばは二通りに用いられる。(1)は翻訳の一種で地名、人名、その他を日本のものに変えるほかは原作に忠実に訳出する。成人文

学では、明治期に黒岩涙香がユゴーの『レ・ミゼラブル』を『噫無情』の題名で紹介し以後その題名が一般化している。児童文学では、一九一一年菊池幽芳がマロの『サン・ファミーユ』を『家なき児』の題名で訳出。主人公の『レミ』を『民』、シャバノン村を『鯖野村』としている。(2)は、外国作品から筋を借りてほかは全く自己の作品にしてしまうもので、原作者を明示しない。いわゆる『焼き直し』である。尾崎紅葉の『人むく助』は、アンデルセンの『大クラウス・小クラウス』の筋を借りた翻案である。

(塚原亮二)

洪汎濤 ホンシントウ 一九一八~ 中国の児童文学作家。浙江省の貧しい家庭に生まれ、抗日戦争の時に各

地を流浪しながら、多くの民間伝承を集めた。開放後、少年児童出版社で「少年文芸」など編集の仕事のかたわら、児童文学の創作をはじめ、民話を材料とする独自の童話を多く世に送り出す。中でも『マーリヤンとまほうのふ』(一九五七)は、第二次全国少年児童文芸創作で、一等賞を受賞した。また映画にもなり、国際児童映画祭で特別優秀賞を受けた。

(君島久子)

本庄陸男 (ほんじょう りくお) 一九〇五～三九(明38～昭14) 小

説家。北海道生まれ。青山師範卒。小学校に勤めつつ創作を発表し、一九二七年には前衛芸術家連盟に参加、代表作に長編『石狩川』(三九)がある。児童文学関係の仕事には二八年の「教育新潮」に発表したものが早く、また二八年に結成された新興童話作家連盟に参加、かつ「少年戦旗」の創刊にも深くかかわり、同誌に『仮想の正体はデクの棒』などを発表して、プロレタリア児童文学運動の一翼を担つた。評論集に『資本主義下の小学校』(一九三〇)がある。

(向川幹雄)

ボンゼルス ヴァルデマル Waldemar Bonsels 一

八八一～一九五一 ドイツの詩人、児童文学作家。ハンブルクの近郊アーレンスブルクに医者の息子として生まれ、キールで学業を終えたのち、未知のものへのあ

こがれやみ難くヨーロッパ各地からエジプト、インド、さらに南北両アメリカにも旅行した。自然の神秘と小さな動物の生活に自分の世界を見いだし、小説、

旅行記、劇、メルヘン、抒情詩などさまざまなジャンルにわたって数多くの作品を書き、そのほとんどすべてが大量に版を重ねた。当時最も人気のあつた作家の一人で、外国语に訳された作品も多い。中でも『みつばちマーヤのぼうけん』(一九二二)と『天国の民』(一五)は世界的に大成功を収めた。とくに有名な前者は、動物の生態を描くのではなく、昆虫を擬人化して人間の世界を描き出した抒情味あふれる作品で、我が国でもなじみが深い。ほかに『インド紀行』(一六)が日本語に訳されている。

(閔楠生)

ボンゾン ポール ジャック Paul Jacques Bonzon 一九〇八～ フランスの教育者、児童文学作家。二

五年間教師、校長を務める。前期は、ジュネス賞(新人賞)を受けた『Du gui pour christmas クリスマスの木』(一九五三)のように心理描写に、後期は『Les six compagnons 六人の仲間』シリーズ(六二)のように冒険に重きをおいた作品が多い。『シミトラの孤児たち』(五五)、『L'eventail de Séville セビリアの扇』(五八)も賞を受けている。作品数、部数とも大変多く、翻訳も一六カ国。最も人気のある作家のひとりである。

(末松水海子)

本田庄太郎

(ほんだ とうろう)

一八九三～一九三九(明26～昭

14) 童画家。静岡県浜松市に生まれ、高等小学校を卒業したのち、太平洋画会研究所で石井柏亭らに洋画を

学ぶ。一九一三、四年ごろより「幼年画報」、「幼年世界」などの幼年雑誌に挿絵を描きはじめ、その後「コドモノクニ」「コドモアサヒ」「子供之友」などの絵雑誌で活躍する。主な絵本作品に講談社の絵本『こがね丸』（一九三二八）、『孫悟空』（三九）などがある。「童画」の先駆者の一人であり、大正末から昭和のはじめにかけて代表的童画家として人気を博したが、終生タブロー画家へのあこがれを抱き続けた。浮世絵を研究し、洋画から日本画への傾斜を強め、帝展の日本画部門に入選したこともある。画風は、丸みをもつた柔らかで明解な線描と淡泊な色調に特徴がある。様式化された丸顔の子どもの顔は、その後の童画家にも影響を与えた。童画にしばしば現れる「元気な良い子」の一つのパターンを形づくった。

（松本 猛）

本田和子

（ほんじゆく）

一九三一～（昭61）児童文化

研究家。新潟の生まれ。お茶の水女子大学を卒業後、同大学で教鞭を執る。児童文化にかかる問題を中心とし、児童文化を捉えようとした『児童文化』（一九七三）をはじめ、それを発展させたものとして、『子どもたちのいる宇宙』（八〇）、『異文化としての子ども』（八二）、『子どもの領野から』（八三）など、これまでの児童文化論とは異なる視点の著作がある。

（安藤美紀夫）

本田増次郎

（ほんだ ぞうじろう）

一八六七～一九一五（慶應3～大

14）英文学者。岡山県中央町上打穴里に生まれる。嘉納治五郎の弘文館幼年舎監督、第五高等中学校（熊本）教授、大阪高英学校副校長、東京高師教授、東京外国语学校教授、一九〇九年に英米に派遣留学、一三年帰国後文筆生活に入る。黒馬の身の上話として書かれたシューエルの『黒馬物語』の最初の完訳者。『小公子』『十五少年』とともに明治期翻訳児童文学の三大訳書といわれた。訳書は一九〇三年東西出版社発行。それまで『名馬すみぞめ』『黒美』として前半を抄訳した訳者があつたが完訳はなかつた。

（滑川道夫）

ボンド マイケル Michael Bond 一九二六～イ

ギリスのユーモア作家。第二次世界大戦後、BBC（英

国放送協会）のカメラマンになるが、あるクリスマス・イブに、売れ残りのぬいぐるみの熊を氣の毒に思い、買って帰ったのがきっかけで、代表作『くまのパディントン』（一九五八）が生まれた。主人公パディントンの好奇心と親切心があだになつて、次々と起ころる事件をユーモラスに描いた話は、たちまち人気を博した。この成功でカメラマンから作家に転向した彼は、以後、一〇冊あまりのパディントンのシリーズを発表。作品は各国で訳され、愛読されている。ほかにも、気取り屋のモルモットを主人公にした『オルガ・ダ・ポルガ物語』（七二）などがある。いずれも主人公の動物本来の持味を生かしつつ、動物と人との日常的なかかわり

の中にユーモアを見いだした、英國人らしいウイットに富む作品である。小説のほか、BBC放送向けの脚本も書いている。

(白井澄子)

ホーンブック Horn-Book ABCや数字、主の祈りを印刷した紙を羽子板状の台に貼りつけ、その上に透明な動物の角の薄板をおおつたもの。大きさは取っ手を含んで横七センチ×縦一三センチぐらいのものが多。子どもを意識してなされた出版物のはじまりで、印刷、紙が貴重であった時代の教育玩具であり、ABC絵本の元祖ともいえる。現存する最古のものに一四五〇年代のものがあり、一六世紀から一八世紀にかけて盛んに使われた。一枚刷りから、折りたたんだものを台に貼りつける「バトルドール」に発展した。

(三宅興子)

本間芳男 (ほんまよしお) 一九三三～(昭8～) 児童文学作家。新潟県巻町に生まれる。巻高校卒。一九六〇年北陸児童文学協会「つのぶえ」同人。同誌に処女作『黒わくの秘密』を発表。七〇年『死なないルウ』を自費出版。以後『越後国の赤い川』(一九七五)、『父たちの河』(七七)、『雪の降るくに』(八二)などを発表する。短編では、佐渡金山を扱った作品が多い。(橋本ときお)

翻訳 (ほんやく) 他国語の文を自国語に訳出すること。

外国文化の受け入れの重要な手段で我が国の文化は翻訳によって発展してきたといわれる。我が国の近代児

童文学の発展も翻訳抜きにはあり得なかつたろう。それほどに翻訳の意義は大きい。翻訳のそれぞれの方法は概念が確定していないが一般に次のように考えられている。(1)完訳。原作を省略なしに忠実に訳出すこと。これが翻訳の正道である。(2)抄訳(縮訳ともいう)。原作の一部を省略して訳出すこと。長編作品の場合には、読者が理解しやすいように抄訳することが多い。子ども向けの『ガリヴァー旅行記』のほとんどがこの方法によつている。(3)ダイジエスト。適當な訳語がないために英語がそのまま用いられている。摘要、要録の意味で作品の全体をまとめて物語化すること。ラム姉弟の『シェイクスピア物語』は定評のあるダイジエストである。我が国では、原作によらずに訳文をもとにしてまとめる再話と同意義に用いらることが多い。(4)重訳。原作以外の国語に訳された底本をもとに訳出すること。明治期には、英訳を通してフランス、ロシア文学が我が国に紹介された。翻訳の方法には以上のはかに直訳(逐語訳)と意訳がある。

(塚原亮二)